続・Best Friend～絆～

春生向日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
続・Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ～絆～

【Ｎコード】
Ｎ２９２５Ｅ

【作者名】
春生向日葵

【あらすじ】
愛結美の死後、遺された家族は実家へ戻り、七菜子は恵里と再会。そして…

前編

愛結美の死から1年が経ち、聡史は子供たちを連れて実家に戻った。

愛結美の分も、子供たちを育てようと頑張っていた聡史だったが、やはり仕事をしながら小さい子供たちを一人で育てるのには無理があり、実家の両親や愛結美の両親の薦めもあって、子供たちが手を離れるまでは実家で面倒を見て貰おうと決めた。

『聡史さんにはまだ長い人生がある。愛結美の分も頑張ろうとしてくれるのは嬉しいけど、あまり無理はしないで下さい。この人と思う人がいたら、その人と結婚してくれても構いません。あなたには、あなたの人生があるんですから…』

愛結美の両親にそう云われたが、聡史は誰とも結婚する気はなかった。

『俺の妻は、愛結美だけで充分過ぎます』

『でも…愛結美はきっと、あなたの幸せを望んでますよ』

『だったら、このままでいいんです。俺は、充分幸せですから』

その言葉通り、聡史は両親の手を借りて、一人で二人の女の子を立派に育て上げた。

聡史が実家に戻って以来、七菜子は一度も連絡を取っていない。

『元気でね』

それが、聡史と七菜子が交した最後の会話だった。

それから数ヵ月が過ぎた頃、七菜子は街で偶然恵里に再会した。

恵里は、小さい男の子を連れて買い物していて、昔と変わらない態度で、七菜子に声をかけてきた。

『久し振り！愛結美とはまだツルんでんの？愛結美元気？』

『愛結美は…』

七菜子は少し迷ったが、あまりにもしつこく聞いてくるので、正直に打ち明けた。

『嘘でしょ？』

『本当…』

『本当なの？』

『うん』

恵里は言葉を失っていた。

あの愛結美が…

恵里は思い出していた。

高校時代、七菜子を愛結美に取られた気がして、その嫉妬から、学校中に嘘の噂を広めた事を。

『私がお墓参りしても、平気かなぁ…』

『愛結美の？』

『うん…愛結美、嫌がるかなぁ…』

『昔の事なら、大丈夫だよ…愛結美、もう気にしてなかったし』

恵里は変わっていた。

あれほど、人に媚びた態度を取りながら、本当は見下してるような人間だったのに…

今の恵里からは、昔のいやらしさを一切感じない。

高校時代からこうだったら、愛結美は恵里を嫌わなかったかもしれないのに…

『一周忌は過ぎちゃったけど、連れてってあげようか？』

『本当？じゃあ、私予定開けとく』

数日後、七菜子は恵里を、愛結美の眠るお墓まで連れて行ってあげた。

恵里はお墓に花と線香を供えると、手を合わせて小さな声で呟いていた。

『ごめんね、愛結美…』

恵里は変わった…

七菜子は、恵里の背中に微笑んでいた。

恵里はゆっくり立ち上がると、コンビニの袋から冷えた缶ビールを取り出し、１つはプルトップを開けてお墓に置き、１つは七菜子に渡した。

『愛結美と呑もう！』

二人は缶ビールを開けて乾杯した。

愛結美がいなくなったからではなく、恵里はきっと、ずっと悔やんでいたのかもしれない…

もしもあの時、恵里が今のように素直になっていたら、もしかしたら、もっと違っていたかもしれないのに…

『愛結美って、変な奴だったよね…』

『最高だったけどね…』

『愛結美…生きてたら許してくれたかな…私の事、何か云ってた？』

『何にも…愛結美は、いつも明日しか見てなかったから…あの時の事も、愛結美は本当は、少しも気にしてなかったんだよ』

『そうなんだ…』

恵里の目に、うっすらと涙が滲んでいた。

『恵里が、もっと素直な気持ちで愛結美に話し掛けてたら、愛結美だって、あんなに恵里を拒まなかったかもしれないよ…』

『そう…だよね…私、何であんなにひねくれてたんだろう…話し掛けると逃げる愛結美が面白くて、でももっといろんな反応が見たくて…七菜子を愛結美に取られた気がして…出来る事なら、戻ってやり直したい位だよ』

『大丈夫…愛結美は聞いてるよ、きっと』

恵里がそっと涙を拭った。

『判ってるよね、愛結美…』

七菜子が恵里の供えたビールを手に取り、墓石の前の地面に静かに流すと、恵里は自分の缶ビールを墓石に軽く当てて、『乾杯』と云った。

『今度はいい酒持って来るからね』

『恵里、あんた愛結美が天国でベロ酔いしたらどうするのよ…愛結美お酒弱いんだから』

『じゃあ…そこそこの酒持って来るからね』

二人は愛結美のお墓に語りかけながら、ビールを呑んで愛結美の思

い出話に花を咲かせた。

次の命日に、七菜子が愛結美の墓前を訪れると、そこには綺麗な百合の花と、高そうなワインが供えられていた。

恵里だ…忘れてなかったんだ…

七菜子はクスリと笑って、恵里の花の中に自分の花を加え、愛結美の好きだった果物を供えた。

5年後、旦那の転勤が決まり、七菜子たちは神戸に引っ越して行った。

愛結美の墓参りは出来なくなってしまったが、きっと愛結美はちゃんと見ている…

そんな気がしていた。

生前、愛結美は大きな心の支えだった…

今は、強い励みを感じる…

愛結美が見ている…

そう思うと、七菜子はどんな事も頑張れた。

後編

それから何年もの月日が過ぎ、七菜子の子供たちも成人して、もう一人前の大人として独立している。

５０歳を前にした七菜子は、思い出していた。

相変わらず首にかけている珊瑚の指輪…

もう、体の一部になっている。

愛結美…

まだ小さい子供を遺し、若くして他界した生涯最高の親友…

自分はこんなに老けて、白髪も目立つようになった…

肌は張りを失い、シミやシワも、もう隠せない。

でも愛結美は…

亡くなった時の若いまま、七菜子の記憶に残っている。

もう遠いものとなってしまった愛結美との日々を、ぼんやりと思い出している時、長男の裕也から久し振りの電話がかかってきた。

『もしもし、母さん？来週の土曜日なんだけど、親父いるよね？』

『いると思うよ…多分ね』

『多分じゃ困るよ！親父と母さんに大事な話があるのに…』

『大事な話って何よ…今じゃ駄目なの？』

『駄目！電話じゃ云えないよ』

裕也がこんなに改まって電話をして来るのは初めてだ。

もしかして、この子…

『兎に角、来週の土曜日は、親父も母さんも家にいてくれよ…多分昼過ぎにはそっち着くから』

『わかった…じゃあ待ってるね』

七菜子は電話を切り、仕事から帰宅した旦那に、息子からの電話を伝えた。

『嫁でも連れて来るのかもな…』

『いい子だといいね…』

二人は今から楽しみだった。

裕也との約束の日、案の定、裕也は一人の女性を連れて来た。

そして、二人を前に正座すると、緊張した面持ちで云った。

『親父、母さん…この人、俺の会社の後輩で…今、真剣に付き合っ

てて、近い将来結婚したいんだ…』

『そうか…結婚するか…』

息子が結婚する。

七菜子はその喜びを隠せなかった。

ただ…この娘…誰かに似ている…

笑うとクシャクシャになるこの笑顔…

七菜子は記憶を探ったが、どうしても思い出せない。

『あなた、お名前は?』

『長谷部優里です…よろしくお願いします』

七菜子の顔色が変わった。

聞き覚えのある名前…

名前が同じだけだろうか…

同じ名前なんて、どこにでもいるし…

でも…この目…

七菜子は思い切って聞いてみた。

『長谷部優里さん？…失礼ですけど…あなたのご家族の事、聞いてもいい？あなた、ご兄弟は？』

『妹が一人います』

『妹さんのお名前は？』

『…絵莉花です』

『絵莉花…長谷部優里…』

そこにいた全員が、不思議そうな顔をした。

『優里さん…間違ってたらごめんなさいね…もしかして…あなたのお父さんは…長谷部聡史さん？』

『え…はい…そうです…父をご存知なんですか？』

『ええ、ちょっとね…あなた、お母さんは？』

『母は…私が小さい時に亡くなりました』

こんな偶然があるのだろうか…

この子は…

七菜子は目眩がして、同時に大粒の涙が溢れて来た。

『母さん？どうしたの？』

『覚えてないのも、無理はないわよね…あなたたち、まだ小さかったんだから…』

『え？何の話？母さん大丈夫？』

みんなが心配そうに、七菜子を見ている。

『大丈夫…凄く嬉しくて…懐かしくて…』

優里は七菜子にハンカチを差し出して、涙を拭ってあげた。

『優里さん…あなたのお母さん…名前は…愛結美さんね？』

『え？どうして…』

優里はビックリしていた。

『裕也、優里さん…二人はね、許嫁になりそうだったのよ…私たちが勝手に決めた事なんだけどね』

『え？どう云う事？』

『優里さん、あなたのお母さんはね…私の親友だったの…あなたたちは昔、よく一緒に遊んでたのよ…』

泣きながら笑顔で語る七菜子の隣で、『ああ！』と声を張り上げたのは、七菜子の旦那だった。

『そうか！誰かに似てると思ってたんだ！愛結美ちゃんの娘さんだったのか！』

訳が判らないのは裕也と優里だ。

七菜子は押し入れから、大量の写真とアルバムを出して来て、若い二人に見せた。

『優里さん、お母さんの顔知ってる？』

『はい、写真では何度か見てます』

『見て…これがあなたのお母さん、これが私』

『あ！お母さん！！』

優里は口を開けたまま写真を見ている。

『こっちはみんなで写ってるのよ…これが聡史さん、愛結美、優里ちゃん、絵莉花ちゃん…これがお父さん、お母さん、裕也、秀輝…』

二人は、その写真に唖然としていた。

『あなたたちが生まれた時、私たちは、あなたたちの誰かを、許嫁にしようって云ってたの…お父さんに反対されたけど…』

懐かしそうに話す母の顔…

写真に写る女性…

裕也と優里は、おぼろ気な記憶を探っていた。

『こんな事になるなんてね…』

七菜子は涙を拭きながら、ネックレスの指輪に語りかけた。

『愛結美…許嫁にしなくても…この子たち結婚するんだって…愛結美の娘が、私の娘になるみたいよ…』

優里は、心の優しい娘に育っていた。

愛結美の勤勉さと、聡史の温かさを、見事に受け継いでいる。

『優里さん…もっと、よく顔を見せて…』

『はい』

優里は七菜子の目の前に座り、その顔を七菜子に向けた。

少し垂れた大きな目…

長い睫毛…

いつも笑っているみたいな、口角の上がった口…

これは、愛結美のものだ…

ふっくらとした頬は、聡史のもの…

懐かしい親友の面影を、こんなにも色濃く残している。

それに…

優里ちゃんは、イイコに育ったね…愛結美…

その後、二人は結納を済ませ、聡史とも久し振りに再会して、積もる話に花が咲いた。

裕也と優里の結婚式、事情を知る全員が、この不思議な出逢いに驚いていた。

愛結美が生きていたら、きっと二人で大笑いしたかもしれない…

でも、これは愛結美の仕業かも…とも思う。

七菜子は、新婚旅行に出掛ける優里に、愛結美の珊瑚の指輪をプレゼントした。

それが母親のものだと知った時、優里は涙を浮かべて喜んだ。

『大切にします…ずっと…』

1週間の新婚旅行から戻った裕也と優里は、すぐに七菜子の元へ行き、お土産に美しい珊瑚のネックレスを買って来ていた。

木の実のような形に加工されている珊瑚は、ユラユラと揺れて綺麗だ。

『調べたら、母の誕生石が珊瑚だったので…お義母さん首元が寂しそうだったし…』

恥ずかしそうに云う優里の伏せた目が、照れた時の愛結美にそっく

りだ。

その後、暫くは別々に暮らしていたが、優里の妊娠を機に、裕也と優里の同居が決まった。

『優里が、母さんといたいみたいで…』

無理もない。

優里には母親がいない。

優里の祖母も、今頃は娘と再会している頃だろう。

実家にいる父と祖父では判らない不安がある。

優里の母親の分まで、この出産を見届けなければ…

七菜子は喜んで優里を迎えた。

臨月が近付いた頃、ソファに横になり、大きなお腹を優しく擦りながら、ぼんやりと窓の外を見る優里がいた。

その姿を見た時、七菜子は病室での愛結美を思い出してドキッとした。

『優里ちゃん、大丈夫よ…お産は怖くないんだから…』

『お義母さん…すみません…』

七菜子の声に驚いた優里は、慌ててソファから体を起こし、読んで

いたマタニティ雑誌が散らばるテーブルを片付けた。

『不安なのはみんな同じ。でも優里ちゃんには、お母さんがついてるんだから、絶対大丈夫よ』

七菜子は優里をソファに寝かせ、大きなお腹にタオルケットをかけてあげた。

『お義母さん、私の母はどんな人でしたか？私、母の事全然覚えてなくて…』

『仕方ないわよ、優里ちゃんも絵莉花ちゃんも、まだ小さかったんだから…』

七菜子はそっと、優里の髪を撫でてあげた。

『父に聞いても、あまり教えてくれないんです…話すのが辛いみたいで』

『お母さんが亡くなった時、お父さんは凄く自分を責めてたけど…それ以上に、不安があったみたいだから…』

『母の事、聞かせて下さい』

七菜子は、まるで読み聞かせをするように、優里に母親の話をしてあげた。

『愛結美と初めて会った時、愛結美は凄く気難しい人だと思ったの。でも、笑った顔が子供みたいに可愛くて、愛結美が笑うと、まるで花火みたいに光が弾けるみたいだった…』

七菜子が愛結美の話をしている間、優里は七菜子に貰った愛結美の指輪を、無意識に指で撫でていた。

『愛結美は優しくて頭が良くて、ちょっと強くてちょっと弱くて、凄く意地っ張りで…私は、そんな愛結美が大好きだった。優里ちゃんが生まれた時、愛結美も聡史さんも凄く喜んで、いつも誰かが恋しくなる、温かい故郷のような人になって欲しいって、優里って名前にしたのよ』

『そうだったんですか…』

優里は、初めて母親の愛を感じた。

『愛結美が亡くなる時、私に云ったの…聡史さんと優里ちゃんたちと私と、一緒にいられて凄く幸せだったって…』

母の話を、こんなに詳しくしてくれる人がいる…

母をこんなに近くに感じさせてくれる人がいる…

優里は無意識に七菜子の手を握り、目を潤ませていた。

その白い手を優しく握り返した七菜子の脳裏に、最期を迎えた愛結美の奇跡が浮かんだ。

『あの時の愛結美を、私は今でも覚えてる…もう意識がないのに、私の手を握り返して来た愛結美の手…力が入ってなくて、まるで羽根が触ったみたいだったけど、ちゃんと私の手を包んでて…温かかった』

『おかあさん…』

優里は目を閉じて泣いていた。

『あなたを見てると、愛結美を思い出すなぁ…』

『私、母に似てるんですか？』

ポツリと云った七菜子の言葉に、七菜子は嬉しそうに反応した。

それから暫くして、優里は女の子を出産。

若い夫婦は、産まれて来た我が子に、母の名前をつけた。

愛結美のように、素敵な女性になりなさい…

愛結美のように、強い光を放つ人になりなさい…

そして、愛結美よりも長生きしなさい…

そんな願いが、込められていた。

絵莉花も秀樹もそれぞれ結婚し、沢山の孫に囲まれて生きた七菜子は、その孫の成長を見届けた秋、８２歳でこの世を去った。

最期の時、七菜子の顔は、幸せそうに笑っていたと云う。

愛結美と七菜子の愛の絆は、そのまま孫たちにも語り継がれ、孫たちは、奇跡の血を持つ家系だと、密かに祖母たちを自慢に思っているようだった。

七菜子…

見てたよ…ずっと…

ありがとう…

愛結美…

幸せを…ありがとう…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2925e/

続・Best Friend〜絆〜

2010年10月22日13時59分発行